

牧師室から (2021.1.10)

10年前の東日本大震災の時に、地震と津波による被害の上にさらに苦しかったのは、福島原発事故による放射能被害への恐怖であった。

震災直後は北から南に向かって風が吹いてきて、福島原発からの放射能が東京まで及んでいるという話があったが、同じ東北であっても、私がいた石巻は福島から北の方に離れていたし、地震、津波による被害復旧に夢中になって、放射能の問題は次のことであった。しかし、一か月後になってから風が北向きに変わりつつ、石巻も微量ではあるが放射能被害の危険がある地域になっていることを知るようになった。後片付けも終わっていない瓦礫の中で、見えない、そして感じることもできないものへの恐怖で息が詰まるような気がしたのを今も覚えている。

今度のコロナも同じである。見えない、気づくこともできない、病になってからその正体がわかるもので、それに打ち勝つ方法も知らないということでも、放射能と似ているところがある。ただ、放射能は緊急な対処の仕方において地域の範囲の設定がある程度できる局所的な面があり、コロナは全世界的な問題になっている。しかし考えて見ると、放射能被害も全世界的な危機であり、かえって安全を装って私たちの世界全体を破壊しつつあるのは誰もが知っていることである。コロナはワクチンの開発に収束の期待を持っているが、放射能の問題はいまだ解決の糸口が見当たらない。

しかし、何よりも怖いのは、人類のこの様々な試練の中で自分の身の安全のみに心が奪われてしまうことだ。その自己中心的な、頑なな心が今の不幸を生み、またこの不幸によってそのような思いが強まる、その連鎖の中で私たち人間も、被造物も、益々うめき苦しんでいくことになっているのではないだろうか。

主イエスは、この世の終末の徴を告げる中で「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイ 24:12~13)」と言われた。つまり、神を畏れない者たちが威勢を張り、罪ある人間中心の価値観によって支配される世界で、人々は人間らしさの根本である愛を失ってしまう。まさに、今の時代を主イエスは見ておられたようである。

この世にどのような試練があれ、私たちには主が共におられる。神様を愛し、隣人を愛しながら私たちに与えられた人生を全うできるよう、共に祈り、支え合っていくことを切に願う。ここにのみ、救われる道があるから。

(鈴木善姫牧師)